

第35号 通巻第7巻5号

1987年11月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〔524-02〕

滋賀県守山市服部町2250番地

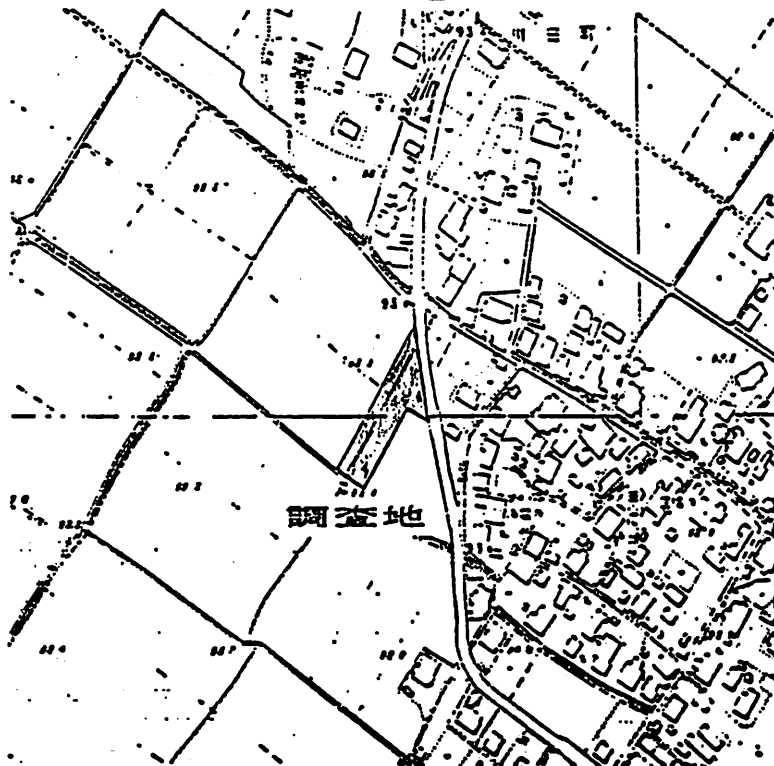
雪がちらつく日々、冬到来。これからは発掘調査に携わる者にとって厳しい時節ですが、寒さに負けずにがんばろうと思います。

発掘調査だより

川田川原田遺跡の調査

前号で調査の一部をお伝えしましたが、10月9日で調査が終わりましたので今回は総括の報告とします。

調査区は大きく4つに分けて行ったところ、どの調査区でも黄灰色粘土で覆われた包含層がみられ、50cm~80cm程度の厚さがあります。包含層内には古墳時代~奈良時代を中心とする土師器・須恵器が多量に含まれていました。遺構



川田川原田遺跡 調査地位置図

はこの包含層直下でみつき、古墳時代前期と奈良時代中頃に分けられます。

まず古墳時代前期の遺構としては土坑と溝があります。土坑は各調査区で検出することができましたが、T-3区では10cmの浅い土坑に壺・高坏などが散在した様みつかっています。またすぐ東側に直径7m、深さ4cmの土坑があり、ここからは小型の壺を中心に堆積していました。溝はT-4区で調査区を縦断する形で、T-3区では東西方向に走っています。遺物は土師器が多いのですが、この中でT-3区の溝からは甗が2点みつかりました。

奈良時代の遺構は溝だけでT-2区でみつかりました。幅は道路の下まで続いているため不明ですが、7~8mの規模があると思われます。深さは深いところで1.6m近くもあります。この溝からは土師器・須恵器・木器が多く出土し、全出土量の半分以上を占めています。この溝は土器などからみると、およそ8世紀代の時期と考えられます。

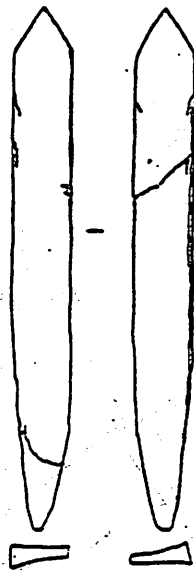
土器の中には墨書土器が含まれていました。今のところ16点を確認できましたが、まだみつかることも考えられます。文字は野洲・門人・寺・倉向殿・官殿・釘などがありましたが、他は読むことができませんでした。

木器の中に1点だけ木簡がみつかりました。長さ13cm、幅2cm、厚さ0.4cmを測り、表面に「稲一束必令持今」と書かれていました。また裏面に墨の痕跡がありますが、ほとんど消えており解読することはできませんでした。木簡以外の木器としては唐鋤があり、上側把手近くは欠失していますが、形としては良く残っています。この他、杭・挽物の容器・曲物の底や蓋・齊串・付札なども出土しました。



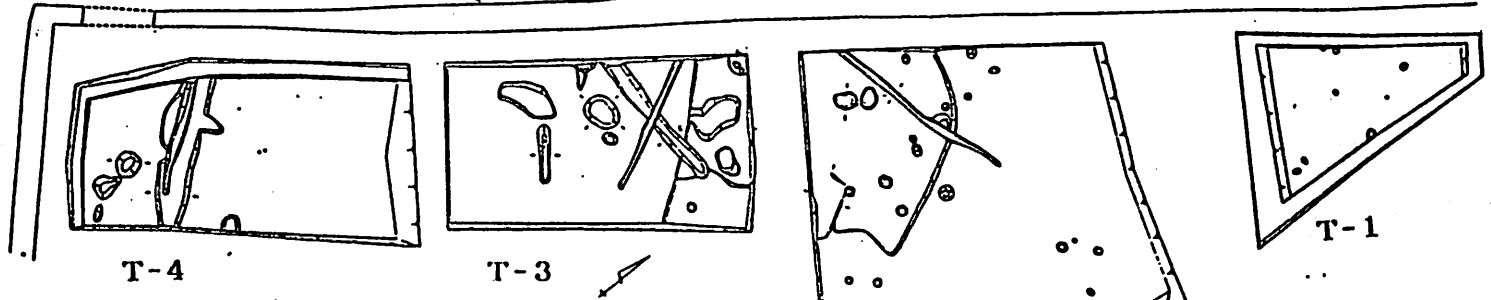
T-2 SD-2出土

「稲一束必令持今」と書かれた木簡 (約2分の1)

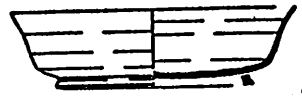
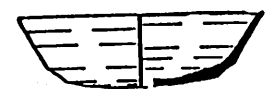
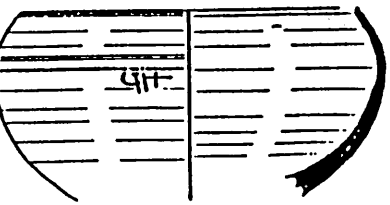
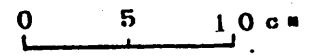
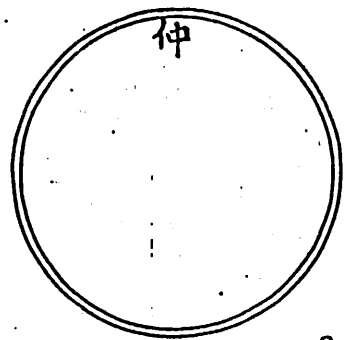


齊串 T-2 SD-2出土

(約2分の1)



川田川原田遺跡 遺構図(100分の1)



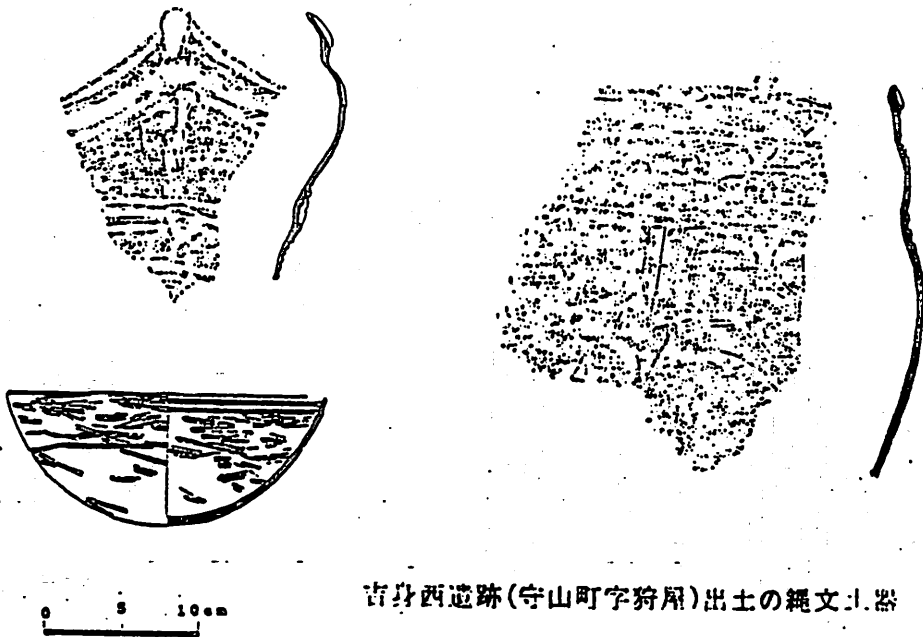
川田川原田遺跡出土 土器実測図

吉身西遺跡の調査（守山町字狩屋）

「乙貞」第35号で報告しました吉身西遺跡の調査も早1ヶ月が過ぎました。これまで縄文時代後期と古墳時代中・後期の集落跡を検出するなど、かなりの成果をあげています。今回の「乙貞」では、現在までにわかったことについて簡単に報告したいと思います。

まず古墳時代の遺構は、中期（5世紀中頃）の竪穴住居4棟とブルーのガラス玉が出土した土坑1基、後期（6世紀後半）の掘立柱建物数棟と溝1条があり、この頃の集落がさらに南にのびることがわかりました。

次に縄文時代後期（BC2000年）の遺構は、古墳時代の生活面より約40cm程下からみつけられました。市内でも播磨田東遺跡をはじめ、この時代の土器や石器は少量がみつっていますが、生活の跡がみつかったのは初めてです。今回みつかった遺構は竪穴住居1棟、土坑3基、そしてピットがあります。竪穴住居は直径約4.6mの円形住居で、中から多量の土器や石器が出土しました。石器はサヌカイトで作った矢じりやタタキ台に使った凹石があります。サヌカイトの産地は奈良と大阪の県境にある二上山が有名ですが、吉身西遺跡で多量にみつかったサヌカイトも二上山から運ばれたものでしょうか。今回みつかった竪穴住居は現在調査中で、まだ住居かどうか断定はできませんが、住居だとすれば県下では大津市穴太遺跡につぐ発見であるといえるでしょう。いずれにしてもこれで守山の歴史がまた1ページ書き加えられることに違いはありません。



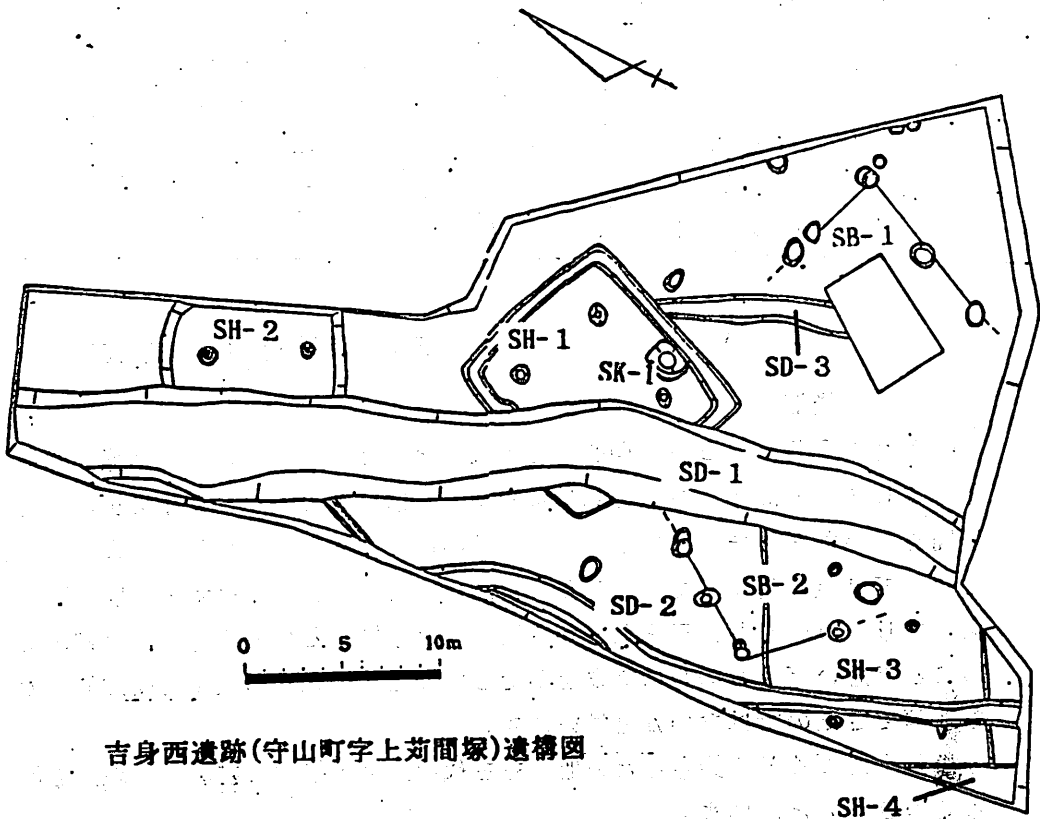
吉身西遺跡(守山町字狩屋)出土の縄文土器

吉身西遺跡の調査（守山市字上苅間塚）

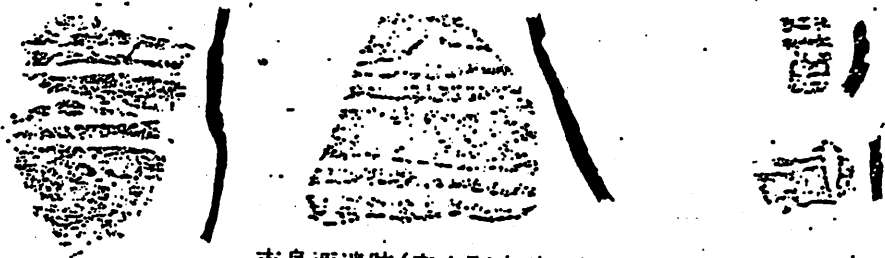
守山警察署と市民病院にはさまれた宅地を9月24日から10月12日の期間で発掘調査しました。現在行なわれている当遺跡調査地（字狩屋）の奥に位置します。

さて今回の調査では、図のとおり竪穴住居4棟（SH-1～4）、溝3条（SD-1～3）と掘立柱建物を想定する柱穴（SB-1～2）を得ました。竪穴住居SH-1は、遺存状態は不良であったものの床面より主柱穴、壁溝、貯蔵穴と考えられる土坑（SK-1）が明瞭に検出でき、伴出する土器から古墳時代中期（およそ1500年前）、そして他の3棟もほぼ同じ時期につくられた住居と考えられ、また溝SD-1、2は古墳時代後期とその時期が新しくなります。

これまで吉身西遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓群など弥生時代の調査成果は多く得ていますが、それに前後する時代の希薄であり、今回の調査は、隣地の調査も合わせ、当遺跡の新たな側面を浮かびあがらせたとと言えます。



吉身西遺跡(守山町字上苅間塚)遺構図

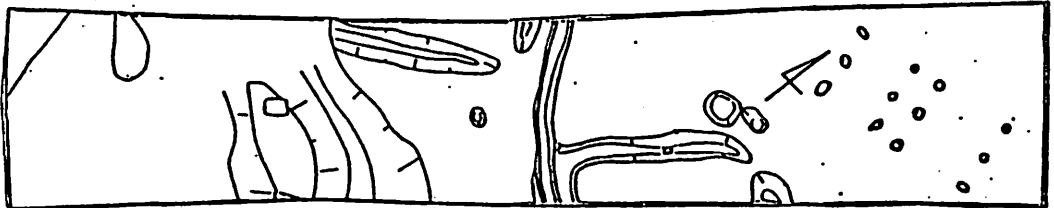


吉身西遺跡(守山町字狩屋)出土の縄文土器 (約3分の1)

八ノ坪遺跡の調査 (播磨田町地先)

市内播磨田町地先の(株)淡海リースの敷地内で、資材置場の造成工事に先立って発掘調査を実施しました。この調査は「乙貞」第35号に紹介した内容の続きで、前の調査の続きの方形周溝墓と、更に1基の方形周溝墓、そして大溝、掘立柱建物2棟を発見しました。

方形周溝墓は弥生時代中頃に造られたもので、更に西側につづくものと思われれます。また、新しく発見された建物跡は古墳時代の前半(およそ4世紀代)に考えられる建物で、納屋か小屋のような建物であったと思われ、近くに大規模なムラがあるものと推察されます。



八ノ坪遺跡(播磨田町)遺構図

《後記》

11月18日～29日の期間、『黄泉』というテーマで秋季特別展を開催致しました。期間中、多数の見学者があり、遠い昔の人々「死後の世界」を垣間見ていただけたと思います。また期間中に体験学習「草と木のまじゅつ」と題して染色に挑戦してみました。自然に成育している草や木…今回は藤、萩、マリーゴールド、玉葱などから染料をとり染めたのですが、何分初めてのことで思い通りの色はでませんでした。古代の人々の技術を断片的にでも理解できたのではないかと思います。

今後も土器づくり、染色などの他にも古代の人々の技術に挑戦し、理解を深めてゆきたいと思います。